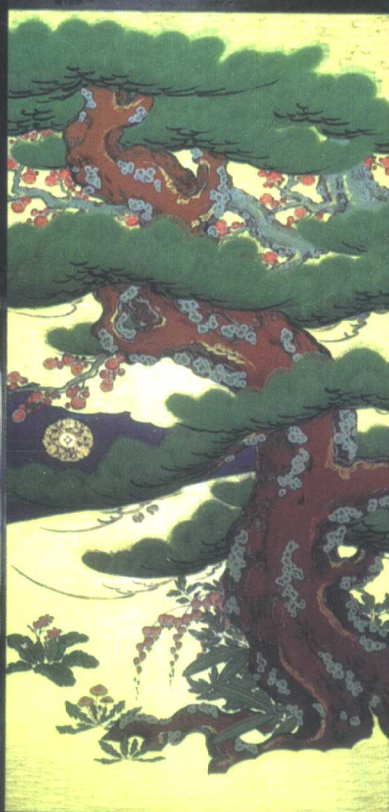


大学日语专业用书

王健宜 刘 伟 编著
加野庸子 审校



日本古典文学



上海外语教育出版社
SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS

1897-27 / 2

大学日语专业用书

日本古典文学

王健宜
刘伟
编著



加野庸子

审校

上海外语教育出版社

SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS

图书在版编目(CIP)数据

日本古典文学(大学日语专业用书)/王健宜,刘伟编著. —上海:上海外语教育出版社,2001

ISBN 7-81080-307-7

I. 日… II. ①王… ②刘… III. ①日语—高等学校—教材
②古典文学—文学研究—日本—日文

IV. H369.4:I

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2001)第 070900 号

出版发行: **上海外语教育出版社**

(上海外国语大学内) 邮编: 200083

电 话: 021-65425300 (总机), 65422031 (发行部)

电子邮箱 bookinfo@sflep.com.cn

网 址: <http://www.sflep.com.cn> <http://www.sflep.com>

责任编辑: 赵丽君

印 刷: 常熟市华顺印刷有限公司
经 销: 新华书店上海发行所
开 本: 850×1168 1/32 印张 10 625 字数 273 千字
版 次: 2002 年 7 月第 1 版 2002 年 7 月第 1 次印刷
印 数: 3 500 册

书 号: ISBN 7-81080-307-7 / I · 033

定 价: 15.30 元

本版图书如有印装质量问题,可向本社调换

前 言

日本古典文学作为人类文化的一部分,伴随着日本这个国家在近代特别是现代的崛起,正受到世界各国日益广泛的关注。在我国,从清朝末期开始,由于国力日渐衰微,中国人的目光从故步自封的自我世界开始投向海外,于是发现世界正在发生着翻天覆地的巨变。日本这个在地理上属于东方的后起之秀,逐渐成为我国模仿、学习、研究的主要对象。然而,任何学习都不能仅仅停留在物质层面上,而是必须深入其精神,否则,最终只能得到些许皮毛与依旧的落后。对日本古典文学应当给予足够的关注,其理由之一也正在于此。理由之二是,日本文学是日本精神与文化的重要组成部分。在我国,迄今为止对日本文学的研究多集中于近现代部分,对古典文学的研究则较少,而日本古典文学也许恰恰是日本精神文化的源头和基础。我们编写此书,正是希望能够为我国的广大读者提供一份了解日本古典文学概观的详实材料。

通常所说的日本古典文学,大致可以划分为四个时期,即上古、中古、中世和近世,从公元3世纪末大和朝廷统一日本建立古代国家起,直至19世纪中叶日本爆发明治维新导致近代国家诞生为止,绵延一千数百年,留下了大量的文学作品。

上古文学,通常是指公元794年日本桓武天皇迁都平安京(即现在的京都)以前产生的日本文学。上古文学的最大特点是,原本没有文字记载的“口诵文学”,如歌谣、祭文、神话、传说等,伴随着汉字的传入开始跃然纸上,统治者开始用汉字编撰历史,追忆自己统一国家的辉煌业绩。于是产生了《古事记》和《日本书纪》。与此同时,汉

诗集《怀风藻》和《万叶集》也应运而生。可以说，中国古代文化尤其是汉字的传入，是日本古代文化、文学产生的最根本的原因和动力。

中古文学，是指公元794年日本平安定都至1192年源赖朝在镰仓建立幕府近400年的时间里出现的文学。这一时期引人注目的文学现象是，随着“假名”的出现，以往被男性所垄断的以汉字为载体的文学领域开始有了女性的介入，于是文学创作者和欣赏者的范围大大扩大，“物语”、“日记”、“随笔”等文学样式开始兴起。脍炙人口的《源氏物语》、《枕草子》等名著均诞生于这一时期。

中世文学，是指1192年镰仓幕府建立至1603年江户幕府诞生这段时期的文学，其时间跨度约400年。中世文学的特点是，既受中古贵族文学的强烈影响，又见武士文学的勃然兴起，更有隐士文学和佛教思想的广泛流行。其中，显示和歌创作突出成就的《新古今和歌集》、以武士为描写对象的《平家物语》以及隐士文学的代表作《方丈记》、《徒然草》等都是千古名篇，被世界各国人们译成多种文字广泛阅读。

日本的近世文学，则是指1603年至1868年大约260年间（史称“江户时代”）的文学。这一时期的文学，无论是创作还是欣赏的主体都由过去的贵族、武士转变为经济实力大增的“町人”，他们不受任何思想和伦理的束缚，为文学的创作和发展带来了勃勃生机与活力。大众文学因此而丰富多彩。虽然文学价值不高，但却赢得了众多的读者，文学繁荣可谓盛况空前。因此，近世文学又称“町人文学”，无论是诗歌的“俳谐”、“川柳”、“狂歌”，还是小说的“人情本”、“洒落本”、“假名草子”、“读本”，乃至舞台艺术的“净琉璃”，无不洋溢着写尽人情世故、享受短暂人生的强烈愿望和切切真情。

编写一本能够比较全面反映日本古典文学概貌，并富有较强鉴赏性、实用性的图书，是我们多年的愿望。本书的特色是，为使读者更好地了解日本古典文学的各种体裁，在打通文学史的前提下，以文学形式为分类依据，选材力求涵盖全部文学名著，全书共收录20部

日本古典文学名著中的 42 篇文章,由佳篇选读、现代日文注释、内容赏析、现代日语译文等构成。

本书由南开大学外国语学院院长王健宜教授和该院日语系刘伟副教授共同编写。日本文教专家小山力先生特别为本书精心编写了“日本古典文学史概论”和“日本古典语法纲要”;文教专家加野庸子女士对全书进行了认真审校并提出了许多宝贵的意见。在此一一深表谢意。

由于编者水平所限,书中错误一定不少,敬请读者批评指教。

编 者

2001 年初春

目 次

日本古典文学の読み方	1
日本古典文学史の概観	3

古典文学作品と鑑賞

第一章 説話文学	17
一 児のそら寝 「宇治拾遺物語・卷一の十二」より	20
二 安養の尼の小袖 「十訓抄・卷六」より	24
三 信濃守藤原陳忠 「今昔物語集・卷二十八」より	27
四 絵師の執念 「宇治拾遺物語・卷三の六」より	38
五 ませの白菊 「古今著聞集・卷八の十一」より	43
六 偷盗の心 「古今著聞集・卷十二」より	48
第二章 物語文学	52
七 かぐや姫の生い立ち 「竹取物語・冒頭」より	56

八	初冠	
	「伊勢物語・冒頭」より	63
九	東下り(一)	
	「伊勢物語・第九段」より	67
一〇	東下り(二)	
	「伊勢物語・第九段」より	74
一一	筒井筒	
	「伊勢物語・第二十三段」より	79
一二	桐壺	
	「源氏物語・冒頭」より	86
一三	若紫(一)	
	「源氏物語・若紫」より	92
一四	若紫(二)	
	「源氏物語・若紫」より	100
一五	弓争ひ	
	「大鏡・太政大臣道長」より	108
一六	祇園精舎	
	「平家物語・冒頭」より	115
一七	木曾の最期(一)	
	「平家物語・巻九」より	122
一八	木曾の最期(二)	
	「平家物語・巻九」より	129
一九	木曾の最期(三)	
	「平家物語・巻九」より	136
二〇	鼠の文使ひ(一)	
	「世間胸算用・巻一」より	140
二一	鼠の文使ひ(二)	
	「世間胸算用・巻一」より	148

第三章	随筆文学 ……………	154
二二	春はあけぼの 「枕草子・冒頭」より……………	156
二三	すさまじきもの(一) 「枕草子・第二十五段」より……………	161
二四	すさまじきもの(二) 「枕草子・第二十五段」より……………	168
二五	ゆく川の流れ 「方丈記・冒頭」より……………	175
二六	飢渴 「方丈記」より……………	180
二七	よしなしごと 「徒然草・冒頭」より……………	186
二八	ある人、弓射ることを習ふ 「徒然草・第九十二段」より……………	193
二九	心なしと見ゆる者も 「徒然草・第百四十二段」より……………	198
三〇	花は盛りに、月はくまなき(一) 「徒然草・第百三十七段」より……………	204
三一	花は盛りに、月はくまなき(二) 「徒然草・第百三十七段」より……………	211
第四章	日記・紀行文学 ……………	217
三二	惜別の門出 「土佐日記・冒頭」より……………	220
三三	少女の夢 「更級日記・冒頭」より……………	227
三四	旅へのいざない	

	「奥の細道・冒頭」より……………	233
三五	造化の妙	
	「奥の細道・松島」より……………	242
三六	はかなき人の世	
	「奥の細道・平泉」より……………	249
第五章	和歌 ……………	254
三七	さわらびの萌え出づる春	
	「万葉集」より……………	256
三八	五月待つ花たちばな	
	「古今和歌集」より……………	263
三九	恋歌(四)	
	「古今和歌集・卷十四」より……………	268
四〇	山もとかすむ水無瀬川	
	「新古今和歌集」より……………	274
第六章	俳句 ……………	280
四一	夢は枯野をかけめぐる	
	「松尾芭蕉の名句」より……………	282
四二	岡にのほれば花いばら	
	「蕪村・一茶の名句」より……………	289

日本古文の基本構文

一	用言に関して……………	297
二	係り結びに関して……………	301
三	否定表現……………	303
四	禁止表現……………	306

五	希望表現	307
六	疑問表現	309
七	過去(回想)・完了・存続表現	310
八	推量・意志表現	312
九	強調表現	314
一〇	感動・詠嘆表現	315
一一	接統表現	317
一二	敬語表現	319
練習問題の解答		322

日本古典文学の読み方

古典の文章は、長い歴史を通して生き抜き、人々に愛読されてきた。それらの作品はみな、それを産み落とした時代・社会の生活と精神とに深く根ざしている。しかし同時に、長い歳月のふるいにかけて現代に伝えられたものであり、すぐれたものは時代を超えて人々を感動させ、いつの時代にもその本質を変えることなしに、人々にとっての心の糧こころ かくでありつづけた。

古典の作品は、あくまでもそれぞれの時代性を背景にして作られたものであるが、それゆえに他の時代から引き離されているということにはならない。むしろ、時代性を超えた一般性、普遍性にささえられ永遠性をもっているものこそが、古典として読み継がれていくのである。内容や思想においてはもとより、表現の面においても、その優れた表現、個性的な表現は我々にとって学ぶべき点が多い。

古典文学を語るには、まず、読むことが基本になければならない。実際に読むことをせずに語るのは観念の遊びにすぎない。作品を読むことなく、多くの時間をかけて多くの参考文献にあたったとしても、それは他人の読みの上になりたっているのであって、少しも作品は解したことにはならない。古典を解するためには、直接その本文の享受に向かうしかない。

なにから読めばいいか。たまたま出会った作品、風味をそそられたものでよい。結果的に共感できる作品、こころ引かれるものを軸にして読み進めていくのが、身についた読み方ができ、追求す

べきテーマに近づく近道となるはずである。傑作といわれている作品も、共感を伴わなければ面白いとは感じないだろうし、それらを、有名だからといってあれこれ読んだとしても、作品を理解し、享受したことにはならない。

しかし、ただ自分の好みから抜け出せないで、それに執するならば、独りよがり、独善の世界に遊ぶことになる。それは趣味として読むにはいいが、文学批評、学問にはならない。分析したり批判したりすることによって、それを組織化し客観化していこうと努力する必要がある。他人の見方に関心をもち、先学者達に学び、謙虚に修正を加えるべきは加え、あるいは拡大しながら自分の見解を形作っていく。すなわち、分析的な読みに、学問としての活動が始まる。

享受の過程をそのままことばで語れば、鑑賞である。それだけに終わらせないで、享受を表現に即して意識化するのが分析である。それは作品を切り刻むのではなくて、享受つまり反応や感受を意識化、言語化する作業である。

小山 力

日本古典文学史の概観

上 代

文学は、文字によって記載されるようになる以前に口誦の時代が長く続き、その上限は相当さかのぼり、明らかにすることは困難である。口誦文学が文字と出会って記載され定着固定するようになったことは、集団的民族的性格を持った文学から、個性的な性格の文学への変化となって表われた。下限を平安京遷都(794年)におく上代文学は、まさに口誦文学から記載文学への両時代にわたるという点、文学ジャンルはわずかに歌謡・祝詞・説話の形態がみられる程度で、他の時代のようにはっきりした区別がなかった未分化の状態という点に、その文学的意義があるといえる。

大和朝廷を中心として全氏族が統一されると、今まで個々に伝えられていた神話、伝説、説話などが、国家意識の目覚めとともにだんだん皇室の伝承を中心として統一されていった。史書というよりも文学として価値の高い「古事記」(712年)である。天武天皇が稗田阿礼ひえだのあれに誦習させたのを太安万侶おおのやすまろが撰録し、紀伝体の形式で編纂されたものである。三巻あって、上巻は神武天皇から推古天皇までを記している。文章は漢文体に国語の語順による書き方、及び、漢字の字音を使って一字一音史記に国語を表す書き方を交えてなるべくもとの国語のまま伝えようと苦心を払っている。八年後の720年にいわゆる六国史りっこくしの初めである「日本書紀」が編纂さ

れた。古事記と同じく天武天皇が、帝紀及び上古の諸事を記させたが、その後舍人親王^{とねりしんおう}によって編集されたものである。三十巻あって、巻一、二は神代、三巻以後は神武天皇から持統天皇の時代までのことを書いている。文章は歌詞や特殊な古詞を除いて、大体純粹の漢文体で書かれてある。これは対外的国史として編集されたためである。「古事記」が伝説的、文学的であるのに対して、「日本書紀」は歴史として史実を重んじた点が著しく異なっている。「日本書紀」より平安初期までに漢文体の書が六種編まれた。「続日本紀」^{にほんぎ}「日本後紀」^{にほんこうき}「続日本後紀」^{もんとくじつろく}「文徳実録」^{さんだいいじつろく}「三代実録」を六国史という。この両書が宮廷内で編纂されたのに対して、古事記のできた翌年、諸国に命じて、その国の地誌や伝承などをまとめさせ、できあがったものが諸国の「風土記」である。多くは滅んで現存するものは、出雲、播磨、常陸、肥前、豊後の五カ国と、その他諸書に引用された部分的なものが伝わっているにすぎない。

「古事記」「日本書紀」に収められた約百九十首の古代歌謡「紀記歌謡」を母胎として生じたものが和歌であり、当代の和歌を集大成したのが「万葉集」である。八世紀後半に成立した現存する最古の歌集で、撰者は大伴家持が中心と考えられている。二十巻から成り、約四千五百首の歌を収める。その歌は内容上、雑歌、相聞、挽歌に大別される。歌体では短歌(四千百余首)、長歌(二百六十余首)、旋頭歌(六十余首)、^{せどうか}仏足石歌^{ぶつそくせきのうた}がある。作者は天皇貴族から農民賤民に至るまであらゆる階層にわたり歌風は概して素朴^{ぬかだのおほ}で写実的といえる。代表歌人としては、初期の女流歌人額田王^{きのみ}、歌聖と称せられる抒情歌人柿本人麻呂^{かきのもとのおひとまろ}、叙景歌人山部赤人^{やまべのあかひと}、人生歌人山上憶良^{やまのうへのおくら}、伝説歌人高橋虫麻呂^{たかはしのむしまろ}、編者に擬せられている近代的歌人大伴家持^{おほとものやかもち}らが挙げられる。また、民衆の歌として東国の民謡的な東歌、九州防備のため東国から徴発された人々による防

もりのうた
人歌などがある。

その他、わが国最古の漢詩集「懷風藻」(751年)がある。また、最初の歌論書である「歌経標式」(772年)、氏族関係として、その氏の由来伝承を記して朝廷に奉った「高橋氏文」(789年)、「古語拾遺」(斎部広成撰、807年)がある。これらの他に、神に対する祈願祝福の詞章である「祝詞」、臣下に対する天皇の「みことのり」で和文体の「宣命」がある。

中 古

平安京遷都(794年)から、鎌倉幕府の開設(1192年)までの約四百年間の文学を中古文学とよんでいる。前期は律令体制の衰退、崩壊。藤原氏一門が政権を掌握し、摂関政治は道長の時代に至って頂点にいたる。後期には武士階級が勢力を強めてきて、やがて院政期、源平の戦い、そして中世へと移っていく。

漢字は真名といわれ、「女手」と呼ばれた仮名とは違って、近世まで公式の文字として重んじられ、特に仮名が未発達もんなでの平安時代初期までは、文字といえば漢字をさした。この時期 810年から820年代にかけて相次いで三つの勅撰漢詩文集「凌雲集」、「文華秀麗集」、「経国集」が出たことでも、720年「日本書紀」に始まり901年「三代実録」までに編まれた六編の正史「六国史」が撰文によって書かれたことでも分かる。また、個人でも菅原道真すがはらのみちざねの「菅家文草」(900年)、藤原明衡の「本朝文粹」(1060年前後)、詩論書に空海の「性霊集」(835年)などが見られ、さらに紫式部や清少納言と同時代の藤原公任の「和漢朗詠集」(1013年)は、中国や日本の、当時有名な漢詩文や和歌を集めたものである。

一方、894年には、遣唐使が廃止され、国風文化の高まりは平仮名の発明も手伝って、10世紀初頭に最初の勅撰和歌集「古今和歌集」を生み出した。和歌が往復書簡に用いられるなど日常化し、長歌が廃れて、専ら短歌のみが作られ、歌合わせのような和歌行事をも流行させた。和歌のこのような日常化・遊技化は、前代の素朴さを喪失させ、技巧的、理知的な要素が強まっていった。この時代に活躍した歌人で、^{ありはらのなりひら}在原業平、遍昭、小野小町、文屋康秀、喜撰、大伴黒主を総称して「^{ろっかせん}六歌仙」と呼ぶ。平安時代の終わり、そして中世に入ると、技巧を超越し、奥深い情趣を求めるようになり、七番目の勅撰和歌集「千載和歌集」(1187年)の編者である藤原俊成は歌の理念を「幽玄」という語で表し、八番目の勅撰和歌「新古今和歌集」(1205年)の編者の一人、藤原定家は、これを発展させ「有心」という理念をうちたてた。また、仏教の讃歌「和讃」から起こって鎌倉時代に全盛を迎えた今様(普遍七五調四句形式の歌謡)を中心とした当時の歌謡を、平安末期に後白河法王が集めて作った「梁塵秘抄」(1172以降)が注目される。

平安時代の文学の特色は、漢文学が隆盛した前期、仮名の発明により和歌や散文が発達し、特に女性(女房)が活躍した中期、さらに歴史物語や説話を生み出した後期とに分けられる。散文の流れを見ると、まず伝奇物語と呼ばれる「竹取物語」(900年頃までに)、在原業平をモデルにした歌物語である「伊勢物語」(900年代初頭)や「大和物語」(952年)が作られている。やがて、この二つの流れを統一し、さらに写実的要素を加味して誕生したのが大作「源氏物語」(1000年代初頭)である。五十四帖から成り、初めの四十一帖に光源氏の生涯、続く三帖に源氏の死後と薫の生い立ち、最後の十帖に薫の半生が描かれている。その十帖は、舞台も宇治に移るので、「宇治十帖」と呼ばれる。その後、平安末期にかけてさまざまな物語が作られたが特に精彩を放つものはなかった。「狭衣物語」